

黙示録22章 「イエスの最後の招き」

1A 都の中央からの川 1-5

1B いのちの水 1-2

2B 神のしもべたち 3-5

2A すぐにでも来られる方 6-21

1B 開かれた預言のことば 6-11

1C 預言者への霊 6-7

2C 御使い礼拝 8-9

3C 明らかにされる行い 10-11

2B イエスからの報い 12-15

1C すべての支配者 12-13

2C 都への入城 14-15

3B 教会のための再来 16-21

1C 御霊と花嫁 16-17

2C 完全な預言のことば 18-19

3C ヨハネの願い 20-21

本文

黙示録 22 章を開いてください。私たちはついに、最後の章に入りました。

1A 都の中央からの川 1-5

初めの 5 節は、天のエルサレムの続きです。御使いによって、ヨハネは、天から降りてきた神の都に案内されます。そこは、宝石の輝きに満ちた、主の栄光が現れていました。そして次に、この都には、大きな川が流れているところから始まります。

1B いのちの水 1-2

¹ 御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、
² 都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。

午前礼拝でお話した、「いのちの水の川」です。永遠のいのちというのが、水として表れており、しかも、流れる川として表れています。主からのいのちは、流れています、動いています。流れて、動いているところにいのちがあります。私たちの体内に流れている血も同じです。血が酸素を運搬していますが、それが動いているからこそ私たちは生きています。それがとまれば、いくら体内に血があろうと、死んでいます。主と共にいる自分が、いのちであるこの方に結ばれているところに、

いのちが流れて、それで私たちは生きています。

そして、それが「水晶のように輝」いているということです。都全体が、ガラスに似た透き通った純金で出来ているのを思い出してください。それは、主の御座が置かれているところだからです。この川は、「神と子羊の御座から出て」います。全く混じりけがなく、純粹であり、罪からも汚れからも、一切から離れておられる方であることが分かります。

それから興味深いことに、「神と子羊の御座」とあることです。ここの「御座」という言葉は、単数形になっています。そして 3 節ですが、「神のしもべたちは神に仕え」とありますが、実際は「彼に仕え」と書いてあるそうです。つまり、神と子羊が「彼」と呼ばれています。ここに、イエスと父なる神が一つにされていることを如実に表しています。イエスはユダヤ人に、「わたしと父とは一つです。(ヨハネ 10:30)」と言われました。

そして知っていただきたいのが、天のエルサレムにおいても、イエスが「子羊」と呼ばれていることに注目してください。この方の流された血の犠牲は永遠に覚えられるのです。罪を赦してください。万物がこの方によって和解したことが、とこしえに覚えられています。

そして、このいのちの水の川は、「都の大通りの中央を」流れているということですが、21 章 21 節に、その大通りの姿が描かれています。「都の大通りは純金で、透明なガラスのようであった。」そのような大通りの中央を、水晶のような命の水の川が流れていました。かつて、エルサレムを潰したバビロンの都も、似たようになっていました。ユーフラテス川が都の中央に流れていました。そこは、汚れに満ちていましたが、こちらは全く純粹です。

そして、ここに両側に、十二の実を实らせる命の木があるということです。この姿は、エデンの園の中央にあった、いのちの木を思い出させます。午前礼拝でお話したように、園の中央から川が四つ流れ出ていました。そして、主が地上に戻られ、千年間の統治をされる時のエルサレムの姿を、エゼキエルが預言しました。こちらも、とても似ています。神殿から水が流れ出て、それが川となり、死海に入り込みます。死海がいのちあるものとなり、魚が住みます。そして、こう書き記しているのです。「47:12 川のほとりには、こちら側にもあちら側にも、あらゆる果樹が成長し、その葉も枯れず、実も絶えることがなく、毎月、新しい実をつける。その水が聖所から流れ出ているからである。その実は食物となり、その葉は薬となる。」天のエルサレムもとても似ています。

詩篇 1 篇では、主の教えを喜びとしている人は、実を結び、葉が枯れない、すべてのことが栄える人だとあります。そして箴言には、知恵のことを「いのちの木」と呼んでいます(3:18)。そして、こうもあります。「11:30 正しい者の結ぶ実はいのちの木である。知恵のある者は人の心をとらえる。」「13:12 期待が長びくと心は病む。望みがかなうことは、いのちの木である。」「15:4 穏やかな舌はいのちの木。偽りの舌はたましいの破滅。」私たちが、キリストにある永遠のいのちが与え

られました。そして、私たちがその知恵にしたがって語る時、人々を生かし、また心を癒すのです。

ここで実が結ばれるのが「毎月」というのが凄いです。実が結ばれるのは、例年、いつの季節か、どの月なのかは決まっています。その他の月に実を見ることは期待できません。けれども、毎月実を結ばせているということは、それだけ絶え間なく命が流れていることを表しています。私たちも、神と子羊の御座から、絶え間なく流れている命にあずかり、豊かに実を結ぶことができるのだということが言えるでしょう。

そして七つの教会の一つ、エペソの教会に対して主は、「勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。(2:7)」と言われたことも思い出しましょう。信仰者には、この木からの実を取って食べる約束が与えられています。

そして、「その木の葉は諸国の民を癒やした」とありますが、この諸国の民は天のエルサレムに出入りしている者たちです。21章26節に、「こうして人々は、諸国の民の栄光と誉れを都に携えて来ることになる。」とあります。彼らがこれらの葉によって癒しを受ける、とあります。ここで大事なものは、「絶え間ない癒し」あるいは「慰め」と言ってもよいでしょう。

「癒し」という言葉を、対処療法的に考えはいけません。つまり、病になってその痛みを取り除くための西洋医学の薬のように考えるはいけません。そうではなく、東洋医学にあるような薬があります。それは、病の時に飲むのではなく、絶えず飲んでいて、それで体がそのような病になる状態になるのを防ぐのです。滋養と言ってもよいでしょうか。私たちが、イエスにつながっていることによって、霊の健康は守られています。傷を受けているからその時にイエスに癒していただくとしても神の憐れみがありますが、永遠のいのちとは、絶えず御子のいのちにあずかっているので、傷や病から守られている状態です。

これで、都の中央から流れているいのちの川と、いのちの木について見ました。エデンの園にある永遠のいのちの回復であり、それ以上であります。園の中央には、いのちの木の他に、善悪の知識の木がありました。しかし、ここにはありません。なぜなら、もう試される必要がないからです。主を愛することを選び取った者たちだけが、この都に入れるのですから、愛しているかどうかをはっきりさせる必要はないのです。園には蛇がいましたが、ここにはいません。悪魔はゲヘナに投げ込まれています。

2B 神のしもべたち 3-5

³ もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中であり、神のしもべたちは神に仕え、⁴ 御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。

神が、嘆き悲しみながら宣言された呪いを思い出します。主は蛇を呪い、女には苦しみとうめき

を与え、そして男には、「創世 3:17 大地は、あなたのゆえにのろわれる。」と宣言されました。イエスは、律法に宣言されている呪いを、木に付けられることによって受けられました。それゆえ、アブラハムへの祝福の約束が、キリストを信じる者に注がれることを、パウロがガラテヤ書で話しています。その呪いが、ここにはありません。

そして、「神と子羊の御座が都の中」にあります。この方に「神のしもべたち」は仕えます。ここで大事なのは、エデンの園でアダムがどのように神に仕えていたか？ということです。呪いを受けた時に、土地が呪われて、それで汗水流して耕さないといけないと言われました。したがって、仕えること自体に呪いはないのです。罪を犯す前のアダムの労働に、回復されることを意味しています。

そして、彼らは、「御顔を仰ぎ見る。」とあります。ここには、神によって聖なる者とされている姿が描かれています。天の御国について山上の垂訓でイエスが語られた時に、「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです。(マタイ 5:8)」と言われました。

モーセのことを思い出します。彼は主と顔と顔と合わせて語り合った預言者です。そして、彼が民の前に出て行くとき輝いていたので、覆いを付けなければいけないほどでした。その彼でも実際には、御顔を仰ぎ見てはいませんでした。モーセが、「あなたの栄光を私に見せてください。」と願ったら、主は、「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。(出エジプト 33:20)」と言われて、後ろ姿にある栄光だけをお見せになったのです。そして、使徒ヨハネは福音書の中で、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。(1:18)」と言いました。御子だけが、神を見ておられたのです。

しかし、今ここで、御座のある都の中にいる聖徒たちは、御顔を仰ぎ見る事ができています。私たちがこの日を待つことで、ヨハネ第一の手紙によると、今の私たちが清められるし、コリント第一 13 章では、完全なものが来た時には、顔と顔を合わせてみるようになります。

そして、「彼らの額には神の御名が記されている」とあります。すでに 7 章で十四万四千人の神のしもべの額に、神の名が記されているのを見ました。自分は神のものなのだとことです。

⁵ もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、ともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは世々限りなく王として治める。

もはや夜がないことは、21 章において既に説明されていました。主がその栄光で輝かせているので、夜はないし、灯の光も太陽の光も要りません。つまり、そこには悪は何一つないということです。ヨハネは第一の手紙で言いました、「私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信は、神は光であり、神には闇が全くないということです。(1:5)」

そして、「彼らは世々限りなく王として治める」ということですが、これが永遠のいのちの最後の姿です。どうして王なのか？ アダムを神が造られた時は、神の造られた被造物を支配しなさいを命じられました。神に仕えるということによって、神の被造物を治めるということも行なう時に、それが永遠のいのちなのです。教会についてヨハネは、神とキリストが「私たちが王国とし、祭司としてくださった(1:6)」と何度となく言っています。

以上、主が永遠の住まい、都として、私たちがどこに入るのかを明らかにしてくださっています。もうすでに、御霊によって始めてくださった新しい働きの延長、完成であることが良くお分かりになると思います。そして、神が初めに天地を造られた状態への回復、いやそれ以上にされるのです。天における反乱、悪魔がすでに滅ぼされているからです。

2A すぐにも来られる方 6-21

これで、すべて預言が語られました。6章以降の最後は、主がすぐに来られること。そして、来なさいという呼びかけで終わります。

1B 開かれた預言のことば 6-11

1C 預言者への霊 6-7

^{6a} 御使いは私に言った。「これらのことばは真実であり、信頼できます。」

すでに、同じことばを20章5節でも語っていました。あまりにもすばらしい、栄光に満ちたことなので、本当に真実なのか疑ってしまうほどです。けれども、これが真実であることを知っているから、私たちは苦しみの中でも信仰をもって喜ぶことができます。アブラハム、イサク、ヤコブの信仰がそのようなものでした。「ヘブル 11:13 これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」「11:16 しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」

そして、ペテロが第二の手紙で、預言のことばがいかに確かであるかを話しました。自分がイエスの栄光に変貌した姿を見た目撃者でありながら、それでも、「さらに確かな預言のみことばを持っています。」と言ったのです。そしてそれを心に留めておくようにと指示しました。「夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めるとよいのです。(1:19)」

^{6b} 預言者たちに霊を授ける神である主は、御使いを遣わして、すぐに起こるべきことをしもべたちに示された。⁷「見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを守る者は幸いである。」

なぜ、それだけ預言が確かであるかと言いますと、「預言者たちに霊を授ける神である主」とあるように、主ご自身が霊を彼らに授けているからです。19 章で天においても、御使いはヨハネに、「イエスの証しは預言の霊なのです。」と話していました(10 節)。第二ペテロ 1 章には、聖霊によって預言者たちはこれらの言葉を書き記していると教えています。私たちは、聖書が神の聖霊の導きによって書かれている、確かで信頼する言葉であることを知っているのです。

そして、御使いがここで強調しているのは、「すぐに」ということでもあります。いつでもおかしくないような状況なのだという注意深さ、用心した心を、神は求めておられます。日本の人は、意外とこのことを体感で分かっています。地震です。しばしば、「すぐにといいながら、二千年も経っているではないか。」と言っていますが、地震を調べている人々も、南海トラフ地震とか、首都圏直下型地震とか、今すぐに起こってもおかしくないと言いつつ、何十年も経っています。でも、すぐにでも地震が起こりえるのです。

しかし、これは警告の意味だけでなく、励ましの言葉でもあります。「この書の預言のことばを守る者は幸いである」とイエスは言われます。1 章の冒頭でも、語れていた言葉です。私たちは、苦難や試練がある時に、今、この時にあなたをそこから救い出す、その助けは今もここにあるという励ましなのです。この希望を持っている人には、御霊が、その希望に相応しい助けを降り注いでくださいます。御霊によって今、将来の希望の前味を楽しませてくださるのです。そのようにして、忍耐する力を与えてくださいます。

2C 御使い礼拝 8-9

^{8a} これらのことを聞き、また見たのは、私ヨハネである。

ヨハネは、福音書でも、この手紙、またこの黙示録でも、聞いて、見たと言って、自分が証言していることを強調しています。

^{8b} 私は、聞いたり見たりした後に、これらのことを示してくれた御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした。⁹ すると、御使いは私に言った。「いけません。私はあなたや、預言者であるあなたの兄弟たち、この書のことばを守る人々と同じしもべです。神を礼拝しなさい。」

ヨハネがこの過ちを犯そうとしたのは初めてではありません。子羊の婚宴の時に、花嫁が輝くきよい亜麻布をまとっている姿を見た時に、御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした(19:10)。なぜ、そうになってしまうのでしょうか？主ご自身が、御使いをお用いになっているため、尊敬の念を抱いているためです。その思いが強すぎて、お用いになっている方ではなく、用いている器に対して拝礼してしまっているのです。ペテロが、コルネリウスの家に行った時もそうでしたね。百人隊長コルネリウスが、「足もとに触れ伏して拝んだ」とあります。ペテロは、「お立ちください。私も同じ人間です」と言って、彼を起こしました。(使徒 10:25-26)

主がご自分の栄光を示すと、そこには絶えずこの危険があります。しもべは、主に仕えて、そのことによって主が働かれます。主人のそばにいますが、自分は見えなくなり、主が見えてこないといけません。黒子です。ところが、その恵みを受けている人は、その黒子に注目して持ち上げようとします。そこで危険なのは、用いられている人です。あたかも自分がその栄光を受けているかのように、うぬぼれるのです。それで、罪を犯した人々は聖書に多く出てきます。

3C 明らかにされる行い 10-11

¹⁰ また私に言った。「この書の預言の**ことばを封じてはなりません。時が近いから**です。

御使いは、自分自身に注目が行くのを拒否してから、注目してほしいことを語り続けます。それは、これら預言の**ことば**です。預言の**ことば**に、イエスが証しされていることを、天においてヨハネに御使いが示しました。そしてここでは、預言の**ことば**が開かれているということです。封じ手はいけないということです。

ここではっきりと対比されているのは、ダニエルの預言です。ダニエルは、終わりの日の大きな戦いについての啓示を受けたあと、その意味を知りたくても、理解できませんでした。けれども御使いが、教えました。「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、この**ことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと捜し回る。(12:4)**」そしてついに、キリストが来られて、その書が開かれたのです。黙示録の始まりが、「**イエス・キリストの黙示**」だったことを思い出してください。黙示は、本当は啓示という訳です。すなわち、いままでぼやけていたこと、あるいは隠されていたことが、明かされるということです。完全に明かされることです。ですから、今、この預言のことは明かされており、それを敢えてぼかしたり、隠したりしてはいけないということです。

多くの教会が、このことについて、神の命令を軽んじているのではないかと感じます。「黙示録は分からないものだ、象徴や暗示が多く、理解が難しい。」とか、「黙示録を使って、極端になる人々がいる。」とかいって、それを取り扱わないのです。これほど、主のみこころに反することはないのではないのでしょうか？それらは単なる言い訳です。預言の**ことば**を、封じてはならないのです。これを聞いて、しっかりと心に保っていないといけません。

ある人が言っていました。自分は歴史が好きだったけれども、学校では戦後の歴史は教えられなかった。けれどもある人から、外交官になると、歴史の一端を担うことになると言われて、外交官の道を進んだそうです。そうですね、歴史教科書は、古代はしっかり学び、中世まで学びますが、近現代は手薄になります。戦後は、ほとんど学びません。試験にも出ないし、意見も分かれるしとか言って、学ばないのです。ましてや、外交官のように、その現場に自分の身を置く人はほとんどいないでしょう。

これが、霊的にも起こっているのです。黙示録が分からないのは、牧者が教えないからです。な

ぜ、牧者が教えないのかということ、自分自身が分からないからです。そして、なぜ分からないのかということ、神学校の組織神学の学びで、終末論は詳しく学ばず、独学のように一人一人に任されているからです。初め、すなわち創世記についてはじっくり学ぶのですが、そして福音書はしっかり学び、教会によっては、使徒の手紙の一つを何年もかけて学ぶことはあります。けれども、初めはよいのに、終わりまで貫徹しないのです。しかし聖書自体が、終わりについて、それをしっかりと保っているように、守っているようにと戒めているのです。神のご計画の初めだけでなく、終わりまでしっかりと心に留めて、それで、神のみこころを全うできます。

ここで、「時が近い」とあります。黙示録の冒頭にもありました。この時は、物理的な時間以上に、そういう時期だよということです。時間よりも機会を示しています。イエスが弟子たちに、今は収穫の時だと言われた時と似ています。収穫をするための機会が一気に増えたので、それで今がその時だと言っているのです。ですから、時が近いのです。しばしば、占いのように携拳がいついつだと言って、外れる人がいます。そしてそのことに反応して、主の来臨が近いということ、浮足立っているとかいって、あざけったり、危険視したりします。違いますね、日時設定をすることは誤っていますが、いつ主が来られてもおかしくないとスタンバイしないのは、同じぐらい間違っています。

¹¹ 不正を行う者には、ますます不正を行わせ、汚れた者は、ますます汚れた者とならせなさい。正しい者には、ますます正しいことを行わせ、聖なる者は、ますます聖なる者とならせなさい。」

御使いは、今、招きの言葉を与えています。二つの道があり、どちらかの道を選びなさいという呼びかけが聖書の多くにあります。モーセは、申命記においてこう言いました。「申命 30:19 私は今日、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」そして山上の垂訓においてイエス様は、狭い門から入りなさい、滅びに至る門は大きいのだと言われます。

預言のことばによって、どちらにいたかが明らかにされます。不正の中にいる者は、ますます不正であることが明らかにされ、正しい者は正しいことが明らかにされます。これまで隠れていたものが明らかにされるのです。そして、中間はないのです。正しくもあって、不正でもあるということはないのです。「ますます」という言葉が大事です。毒麦が蒔かれた畑の喩えにありました。それまでは、正しい者、不正な者の区別が難しかったのですが、それが終わりの日には実が明らかにされて、それで主が収穫します。

そして、「ますます」という言葉には、さらに、「あなたが自分の生活を支配できなくなるよ」という警告と、励ましがあります。警告とは、自分が自分勝手な道を選ぶのであれば、どんどんその泥沼の中に入っていき、ますます汚れた者になってしまうのだということです。励ましとは、自分が御霊に導かれることを選ぶ時に、神の御霊がどんどん聖めてくださることだということです。「Iヨハ 3:2b-3 私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリスト

をありのままに見るからです。3 キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」だから、どちらの道を進むのか、今、選びなさいということです。そうすれば、主がその応答に対して、働きかけてくださいます。

2B イエスからの報い 12-15

1C すべての支配者 12-13

¹²「見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。

イエスご自身が、ここから直接、語り始められます。「わたしはすぐに来る」と再び言われます。その時に、しもべに対して主人が行なうこと、つまり、報酬をお与えになります。私たちは、山上の垂訓の学びで、人は必ず報いを求めながら生きているのだということを知ります。人から与えられる報いなのか、それとも主ご自身が報われるのかの違いです。善行を人に知られないようにすれば、天の父がそのまま報いてくださることを話されましたね。私たちは、この方からの報いを期待するように教えられています。

そしてその報いというのは、預言のことばを信じ、受け入れている者にとっては、罪に定めるようなものではありません。褒美としての報酬です。「I コリ 4:5b 主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごともしっかりと明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」どのように裁かれるかを、第一コリント 3 章 11-15 節に、イエス・キリストという土台にそれぞれがどのように建て上げられているかについて、金、銀、宝石、木、草によって建て上げられている姿を書いています。それが火によって試されて、残っているものによって報われます。

¹³ わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」

イエスが 1 章において語っておられた言葉ですね。神がイザヤ書において、最初であり、最後であると宣言されていましたが、イエスがここで明確に、ご自身に対してそう言われているということは、父なる神とわたしが一つであることを宣言しているに等しいです。そして、初めから終わりまですべてを支配されているということです。だから、すべての行いに対してこの方は忘れることなく、報いることがおできにあるのです。

2C 都への入城 14-15

¹⁴ 自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。

黙示録には、何度となく、「白い衣」や「衣を洗う」という言葉が出てきました。それは、一つに子羊の血によって清められたものです(7:14)。そして、子羊の血によって清められたので、正しい行

いという白さを持っています。(19:8)私たちが、いかにキリストという義の衣を身に着けて、困難を耐え忍び、戦い抜く必要があるかを教えています。

そしてそこにある報いがいのちの木の実であり、門を通過して都に入るということです。主が、喩えの中で、王子の婚礼に招かれているであるとか、その中に招待されて、入ることができるのか、そうでないかに心を留めるように語られています。

¹⁵ 犬ども、魔術を行う者、淫らなことを行う者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は、外にとどめられる。

汚れや不正を選んだ者たちは、ますます汚れるようになるのですが、そういった者たちには戸は閉じられています。主は狭い門から入りなさいと言われました。そして滅びに至る門は大きいと言われました。

アジアの七つの教会の町の遺跡には、汚れがいっぱいであったことを証しています。主を求める者たちは外に置かれている思いだったでしょう。ペルガモンには、古代医療センターのアスクレピオンの神殿がありますが、それは医療の神であり、そこで行われていたのが魔術です。そして、エペソには、ケルスス図書館という、ローマにおける三大図書館の一つがありますが、その目の前に遊郭がありました。そして、淫行によって望まぬ妊娠をしますから、それを遺棄するところもあるそうで、人殺しも当たり前のように行われていました。あらゆる偶像の神々や、皇帝を神としてあがめる神殿や門がたくさん遺っています。

しかし、終わりの日には立場が逆転するのです。衣を洗う者たちが、門を通過して都に入れるようになります。そして、汚す者たちが外に置かれるのです。

3B 教会のための再来 16-21

1C 御霊と花嫁 16-17

¹⁶ 「わたしイエスは御使いを遣わし、諸教会について、これらのことをあなたがたに証した。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」

イエスが、教会に対して語られています。1章の初めに、七つの教会、諸教会に対してイエスが語られていました。

そしてご自身を証しています。「わたしはダビデの根、また子孫」と言われています。イザヤ書11章のメシア預言からのものです。「エッセイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。(1節)」そして、9章にはダビデの子がキリストであることを預言していました。それで、イエスは、福音書で「ダビデの子」と呼ばれたのです。

そして、明けの明星については、イザヤ書 14 章のルシファーがありますが、そもそも神の栄光の輝きを示す言葉であり、神のそばにいる御使いがそのような輝きを持っていたということです。バラムが預言した時に、「ヤコブから一つの星が上り」と言いました(民数 24:17)。ペテロは第二の手紙 1 章で、主を明けの明星として使っています。マラキ書の最後には、キリストは義の太陽として出てきますが、明けの明星は夜明けを示す徴であり、これからの主の到来を示しています。

¹⁷ 御霊と花嫁が言う。「来てください。」これを聞く者も「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。

「御霊と花嫁」とあります。これは、御霊と、御霊によって生まれたキリストの花嫁、教会のことを指しています。花嫁はエペソ 5 章の夫と妻との関係のところで、教会がキリストの花嫁であることがはっきり書いています。だからこそ、花嫁がもっとも求めていること、花婿が自分のところにやって来ることです。「来てください」という、たった一言ですが、この切実で恋い慕うような願いがあって、私たち教会は生きています。

そして、同じ「来てください」では、福音への招きがあります。御霊と花嫁が、来てくださいというのは、主が来てくださいますようにということですが、今度、「渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。」は、主がすべての人々に、わたしのところに来なさいと呼びかけておられるのです。福音を信じなさいという招きです。「ただ」と強調しています。神に渇いている者、いのちの水が欲しい者は、そのまま来なさいということです。

2C 完全な預言のことば 18-19

¹⁸ 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者に証しする。もし、だれかがこれにつけ加えるなら、神がその者に、この書に書かれている災害を加えられる。¹⁹ また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。

預言のことばの完全性について話しています。付け加えても、取り除いてもいけないということですが、モーセも律法の完全性について同じことを、最後の説教、申命記で言っていました。「4:2 私があなたがたに命じることばにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を守らなければならない。」

主イエスも、山上の垂訓の最後で、ご自分のことばを聞いてそれを守る者は、岩の上に建てた家に似ていると語られました。その手前でイエス様は何を語っておられたでしょうか？ そう、偽預言者のことです。付け足したり、取り除いたりする者たちのことです。そしてよみがえられた後、弟子たちに、「預言者たちの言ったことのすべてを信じられない者たち」と言われました(ルカ 24:25)。部分的に受け入れるものではなく、また余計に付け足すものではなく、これで完全なのです。

興味深い表現ですが、付け加えるなら、黙示録にある災いが付け加えられる。取り除くなら、黙示録にあるすばらしい約束、いのちの木と聖なる都から取り除かれるということです。神のことばだけでなく、教えられたところに留まらず、人間的なもので付け加えていくという愚かさがあります。その付け加えは、良いものになることなく、かえって悪いものがやってくるようになります。完全なものに付け加えたら、不完全になるのは目に見えています。そして神のことばが厳しいと思って、その部分を取り除くと、良い部分が取り除かれるのです。自分は悪いところだけ取り除こうとするのですが、必ず良いものを取り除きます。神のことばは一体であり、そのすべてを信じるように命じられているのです。

3C ヨハネの願い 20-21

²⁰ これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

イエスが、先ほどの御霊と花嫁が、「来てください」と言ったことに応えてくださっています。パウロも、コリント第一 16 章、最後のところで、「主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。」と言いました(22 節)。マラナ・タです。これを初代教会の人たちは、挨拶する時に使っていました。主を愛し、恋慕う言葉です。花嫁が花婿に待ち焦がれる姿です。

²¹ 主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。

最後の言葉は、「主イエスの恵み」です。この方が私たちを愛して、命をお捨てになり、罪から解放するために血を流してくださいました。この恵みが、黙示録の啓示のすべてであります。そして聖書のすべてであります。恵みから外れた教えは、聖書からの教えではなく、主ご自身の教えではありません。この恵みが、みなさんにますます満ちあふれますように。そして新しい都に入るにあたって、その豊かさをもって入ることができるようにお祈り致します。